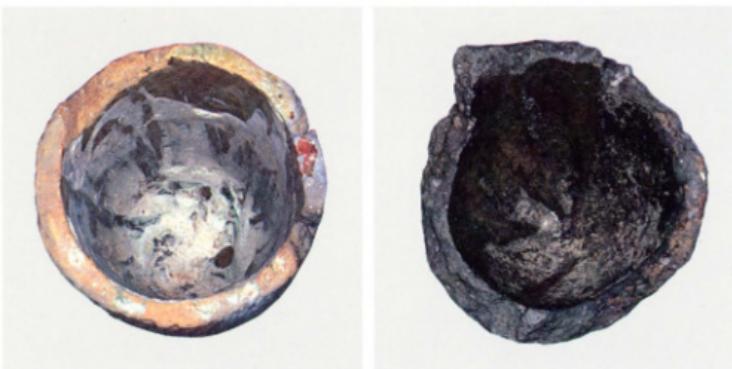




平城京右京二条二坊十六坪
発掘調査概報

奈良国立文化財研究所



上 るつば内面 左S E0450出土 右東市出土
下 S K0625出土の鉱石

序

いまからちょうど20年前に撮影した平城京の航空写真を見て、京内の都市開発状況の今昔を比べてみると、その激しさに驚かされる。奈良市の人口は、撮影時の14万人をすでに倍化したのである。なかでも現西大寺駅近傍の変わりようは、奈良市内でも特に激しく、ほとんどが水田であった駅南側はビル化し、地面を残す所がわずかとなってきている。

このたび明光開発株式会社が、駅南側においてスイミング・スクールとして利用しようとする土地を、関係諸方面的御協力により発掘調査することが出来たのは幸いであった。調査の結果、この地は奈良時代を通して利用されていることが判明し、それにともなう幾多の遺物を採集している。

1981年度も、当研究所平城宮跡発掘調査部が実施した市街化にともなうこのような発掘調査は、40件という多きにのぼっている。

これまでにおこなってきたこの京内遺跡の調査によって得られた成果は龐大なものとなってきているが、それでも広大な平城京の中では1%にも充たないものである。しかし、これらの調査成果をどのように活用していくかも今後の大きな課題となろう。

1982年5月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足

目 次

I 序 章

	頁
1. 調査の経過と概要	1
2. 写 真 測 量	4

II 遺 跡

1. 遺 跡 の 概 観	5
2. 遺 跡 構	5
3. 十六坪周囲の条坊復原	11
4. 占 地	12
5. 時 期 区 分	13

III 遺 物

1. 土 器	15
2. 瓦	22
3. 金属器・木器ほか	23

IV 結 び

24

図 版

口 紙 SE0540出土るつばほか	PL. 1 発掘区周辺航空写真
PL. 2 遺構全景垂直写真	PL. 3 発掘区全景
PL. 4 発掘区部分	PL. 5 建物
PL. 6 建物	PL. 7 建物
PL. 8 小路・土塙	PL. 9 井戸掘形
PL. 10 井戸	PL. 11 井戸
PL. 12 土器	PL. 13 土器
PL. 14 墨書き器・土馬	PL. 15 軒瓦
PL. 16 金属器・木器ほか	

卷末折込 平城京右京二条二坊十六坪（6 AGC-S地区）実測図 1/100

挿 図

	頁		頁
fig. 1 発掘区位置図	1	fig. 2 条坊震跡図	2
3 発掘溝充風景	2	4 周辺地区調査位置図	3
5 標定点配置図	4	6 発掘区北壁東部土層図	5
7 SE0540断面実測図	6	8 発掘区東壁南部土層図	6
9 発掘区西壁南部土層図	7	10 SE0600断面実測図	8
11 西北及び東北トレンド遺構図	10	12 発掘条坊位置図	11
13 十六坪条坊推定復原概念図	11	14 十六坪占地概念図	12
15 時期変遷図（I）	13	16 時期変遷図（II）	14
17 SE0540出土土器（I）	16	18 SE0540出土土器（II）	17
19 SE0600井戸枠内出土土器	18	20 SE0600井戸掘形出土土器	19
21 SK0665出土土器	20	22 SK0625、SD0525・SD0530出土土器	21
23 軒瓦	22	24 金属器・木器ほか	23

表

	頁		頁
tab. 1 周辺地区主要発掘成果一覧表	3	tab. 2 標定点座標一覧表	4
3 主要建物一覧表	10	4 発掘条坊座標表	11
5 十六坪復原座標表	11		

例　　言

1. この概報は、明光開発株式会社（奈良市西大寺国見町 代表取締役 奥西保信氏）が建設するスイミングスクール予定地（奈良市西大寺南町2247ほか）における発掘調査に関するものである。
2. 調査は奈良県教育委員会の依頼で、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当し、工楽普通、綾村 宏、千田剛道、安田龍太郎、亀井伸雄、本中 真が参加した。また、調査にあたっては、明光開発株式会社の協力を得た。
3. 本書の作成は、岡田英男部長の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議をもとに次のように分担執筆した。I-1、II-1、2、4、5、IV(1) 亀井伸雄；I-2、II-3 本中 真；III-1 安田龍太郎；III-2 千田剛道；III-3 工楽普通；IV(2) 綾村 宏
4. 本書の編集は、亀井伸雄があたった。また遺構・遺物・図版の写真は仙 幹雄が担当し池田千賀枝の協力を得た。航空写真的撮影は、アジア航測株式会社が行なった。

I 序 章

1. 調査の経過と概要

この報告書は、平城京右京二条二坊十六坪にあたるスイミングスクール建設予定地（奈良市西大寺南町2247番地-1ほか）において、奈良国立文化財研究所が実施した発掘調査に関するものである。調査は、奈良県教育委員会の指導のもとに原因者負担で実施されるはこびになり、開発行為者である明光開発株式会社の協力を得て、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が発掘調査を担当した。

近年、旧平城京における市街化区域に線引された地域では、市街化が進行している。とりわけ商業地域に指定された近鉄新大宮駅周辺及び西大寺駅周辺の地区では、その傾向が著しく、こうした市街地開発によって、平城京の貴重な遺構が失われていく状況にある。

奈良県教育委員会では、開発担当部局と密に連絡をとり市街地開発によって遺構の破壊が予想される場合少なくとも事前発掘調査を行うことを原則としてその指導に当っている。

当調査地区周辺は、近鉄西大寺駅に近接し、大型店舗、銀行、高層集合住宅等が密集する市街地であり、今後も一層の都市開発が予想される地域である。これまでにも、この地域においては開発に先立つ発掘調査が行なわれてきており、その結果平城京研究に多大な成果を挙げている（tab. 1 参照）。

今回の調査区は、スイミングスクール建設予定地に沿って設定し、約750mを全面的に発掘調査した。調査期間は、昭和56年12月2日から26日までの約3週間である。

発掘にあたっては、便宜上京内地区割にしたがい6 A G C - S 地区と定め、更に国土地理院標準（第六座標系）の基準点（X = -145,545.0, Y = -19,650.0）をSG99として、3



fig. 1 発掘区位置図（奈良市作成「平城京条坊復原図」による）



fig. 2 条坊痕跡図（地名は小字名）

m間隔の小地区割を設定した。

調査区の旧地目は水田で標高70.5mあり、西及び南の調査区外の水田面より約50cm高い。

fig. 2は、昭和37年の $\frac{1}{1000}$ 地形図を基に奈良市所蔵の大正7年「大字西大寺字限地図」にみる土地区画を復原したもので、調査区は、北を一条大路、西を西二坊大路に区切られる十六坪の西寄りに位置し、坪の約 $\frac{1}{6}$ に当たる。

奈良時代の遺構面は、地表下40~60cmにあり、全般的に後世の削平をうけていたものの、遺構の保存状態は極めて良好であった。

検出遺構は、後述のように奈良時代全般及びそれ以降にわたり、その間に営まれた多数の掘立柱建物をはじめ、井戸、堀、道路状遺構、土壌など多岐に及んでいる。調査面積は比較的小規模であるが、検出した柱穴等の数や土器を主体とする遺物の出土量は極めて多く、これまで調査した京内遺跡のなかでも利用密度の高い点では屈指の遺跡ということができる。

調査結果の詳細は、次章以降にゆずるが、調査成果として平城京造営当初から坪内を南北に二分する東西小路の存在を確認できたこと、奈良時代全般にわたり付属的施設と推定される小規模建物群を中心とした敷地利用の概要を把握できたこと、また出土遺物のうち土器類の器種が豊富で完形品に近いものが発見され、そのなかに入名を記した墨書き土器などが出土し、居住者を知る上で手掛かりを得ることができたことなどが挙げられる。

このほか条坊位置の確認のため、調査区北寄り2箇所に小トレンチを設けたが、その範囲では条坊痕跡は検出できなかった。

なお、関係者の協議の結果、検出遺構の全般的な埋戻しは行なわず、遺構面に真砂を厚く敷き養生をはかった。また、井戸枠は2基とも全て取り上げ保存処置を施した。



fig. 3 発掘調査風景

調査日程

- | | |
|----------|---------------|
| 56.12.2 | 現地協議及び調査区設定 |
| 12.4~5 | バックホーによる表土排除 |
| 12.7~17 | 遺構検出 |
| 12.18~19 | 地上写真撮影、空中写真撮影 |
| 12.21~23 | 道り方実測 |
| 12.24~25 | 補足調査、土層図作成 |
| 12.25~26 | 遺構養生（砂入） |

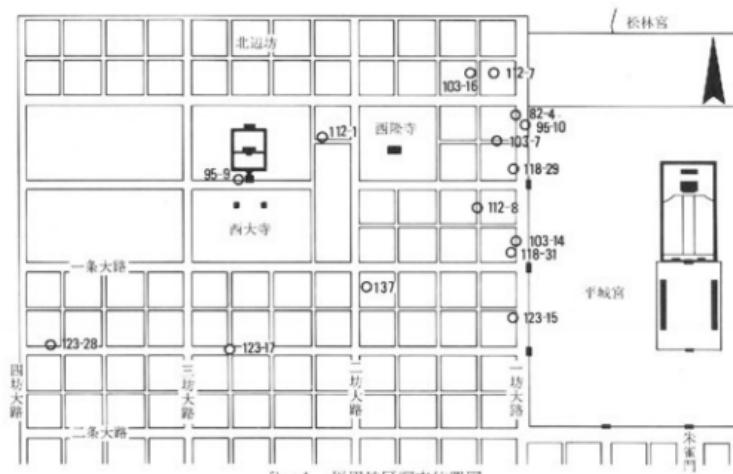


fig. 4 地図調査位置図

年度	次 数	条 号 位 置	面 積	奈 民 時 代 の 主 要 渡 横	主 要 成 果
48	第82-4次	西一坊大路	35m ²	西一坊大路西側溝	西一坊大路位置の確認
50	95-9	西大寺中門付近	33	坪塙小路の南北両側溝	西大寺造営以前の坪塙小路の位置及び幅員の確認
	95-10	西一坊大路	49	西一坊大路東側溝	西一坊大路幅員の確認
52	103-7	右一条二坊一・二坪	800	坪塙小路、掘立柱建物、塀	一・二坪塙小路の位置及び幅員の確認及び坪内利用状況の把握
	103-14	西一坊大路	500	西一坊大路の東西両側溝はか	西一坊大路幅員の確認はか
	103-16	北辺坊、京極大路	1,300	京極大路北側溝、南北小路、掘立柱建物、井戸、塀、溝	京極大路位置の確認、坪塙小路(?)の位置及び幅員の確認、北辺二坊一・三坪の利用状況の把握
53	112-1	右一条三坊三・四坪	490	掘立柱建物、塀、溝	坪内の利用状況の把握
	112-7	北辺二坊二坪	360	掘立柱建物、塀、溝	坪内の利用状況の把握
	112-8	右一条二坊二・七坪	350	坪塙小路、混立柱建物	坪塙小路の位置及び幅員の確認、二坪内の利用状況の把握
54	118-29 # -31	西一坊大路、右一条 二坊一・二坪	570	掘立柱建物、塀、西一坊大路 西側溝	西一切大路の位置の確認はか
	次数外	西大寺西塔付近	214	掘立柱建物	西大寺造営以前の坪内利用状況の把握
55	123-15	右二条二坊三坪	290	掘立柱建物	坪内の利用状況の把握
	123-17	右二条三坊十一・十 五坪	150	二条々間路北側溝、坪塙小路、 塀	二条々間路等の位置及び幅員の 確認
	123-28	右二条四坊十五坪	44	二条々間路北側溝(?)	右京極付近の利用状況の確認
56	137	右二条二坊十六坪	750	坪内の小路、掘立柱建物、井 戸、溝	坪内の宅地割及び利用の変遷の 把握、坪内小路の確認

tab.1 調査区周辺の主要発掘成果一覧表（寺院関係のものは除く）

2. 写真測量

写真測量とは、写真を媒介として間接的に被写体の三次元的測定を行なうもので、精度にムラがなく、いつでも撮影時の状況を再現でき、また測量期間を短縮できる等の利点をもつ。したがって、写真測量は近年大規模な発掘調査における遺構の測量をはじめ各種の文化財調査における測量に利用されている。

撮影の方法は種々あるが、今回はヘリコプターにカメラを搭載する方法を採用した。撮影にあたっては、あらかじめ道幅前に標定点を設置した。

調査地区周辺は、中高層ビルが建ち並ぶ市街地である。本来は、%以上の大縮尺の図化に必要な撮影高度を保つことが望まれるのであるが、飛行の安全性や周囲に対する騒音防止等の配慮もあり、関係者で協議した結果、通常よりやや高い高度（40～50m）で撮影することにし、飛行コースを南→北にとった。

今回は国化するまでに至らなかったが、縮尺 $1/5$ の垂直写真を作成した。また撮影の過程で、調査区周辺の垂直及び斜め写真的撮影も行なった。

なお、現場での実際の道跡測量は、空中垂直写真撮影ののち、造り方実測を実施した。

以下に、撮影時の仕様、標定点配置図及び標定点座標一覧表を記す。

No.	X	Y	Z	撮影仕様
80	-145,546.396	19,598.233	70.979	撮影日時 81年12月18日
81	-145,546.396	-19,607.158	70.245	飛行機 川崎ペルKH-4
82	-145,563.016	19,607.158	70.742	カメラ ツアイスRMK
83	-145,554.856	-19,607.158	70.047	レンズ 150mm
84	-145,540.352	19,607.158	70.741	フィルム コダックトライX
85	-145,533.525	-19,607.158	70.361	撮影高さ 40.5~50m
86	-145,546.396	-19,615.304	70.107	露出 1/450秒
87	-145,561.153	-19,615.304	70.008	絞り 8
88	-145,554.753	-19,615.304	70.112	変位修正 ツアイスSEG-V
89	-145,538.800	-19,615.304	70.264	撮影縮尺 1/380~1/270
90	-145,531.946	19,615.304	70.794	
91	-145,546.396	-19,623.356	70.022	
92	-145,562.113	-19,623.356	70.836	
93	-145,554.463	-19,623.356	70.049	
94	-145,536.907	-19,623.356	70.035	
95	-145,546.396	-19,630.835	70.689	
96	-145,560.182	-19,630.835	69.873	
97	-145,533.761	-19,630.835	70.755	

tab. 2 標定点座標一覽表

fig. 5 標定点配置図

II 遺 跡

1. 遺跡の概観

今回の調査地は、平城京廃絶以降田地となったと考えられる地区で、地形は北西から東南にゆるやかに傾斜する平坦地である。奈良時代の遺構は、主に地表下約40~60cmのところに堆積する地山面（東南部は暗灰褐砂質土、他は暗黄灰粘土）で検出した。この間に耕土・床土の下に厚さ20cm内外の遺物包含層（灰褐砂質土）が堆積する。遺構検出面の一部に奈良時代の整地土と思われる黄灰粘質土が薄く残存していたものの、柱掘形の深さや溝等の遺存状況からみて、全体的に後世の削平をうけたと判断される。

しかし、遺構の保存状態は極めて良好で、多数の柱掘形、土壙、溝、井戸等が検出され、これらを検討した結果、十六坪は奈良時代初頭から平安時代初期にかけて宅地として利用されたことが明らかとなった。

この坪は、奈良時代の中頃を境に前後で宅地割（坪割）が変わり、また井戸の時期から考えて、前半期、後半期とも大きく2時期に区分することができる。

奈良時代前半期は、十六坪は道路状遺構 S F0529によって南北に二分される。この道路は、坪の推定中心線上に位置するため宅地割の施設と判断される。二条の側溝（S D0525、0530）から出土した土器の年代は、ともに奈良時代中頃であるため、ほぼ同時に廃絶したものと思われる。したがって、それ以後には少なくとも坪の西半は一体とした利用されたことがうかがえる。

出土遺物は、多岐にわたる。とりわけ土器類の出土量が多く、また器種が豊富でしかも完形品に近いものもかなりあるのが特徴である。そのなかで人名等を記した墨書き器が二点出土したことは、注目に値する。

2. 遺 跡

検出した遺構で、現在まで明らかとなった主要遺構に、掘立柱建物28棟、塀5条、溝数条、井戸2基、土壙などがある。整理上遺構に一連番号を付し、その前にSA(塀等)、SB(建物)、SD(溝)、SE(井戸)、SF(道路)、SK(土壙)の記号をつけた。以下に順次解説する。なお、()内の寸法は天平尺に換算した値である。

SB0521 発掘区東南隅に位置する掘立柱東西棟建物。東半は発掘区外になる。桁行1間以上(8尺)、梁行2間(6尺等間)で、東西溝SD0525廃絶後に建つ。

SB0522 発掘区東南隅に位置する掘立柱南北棟建物。東側柱列は発掘区外になる。桁行

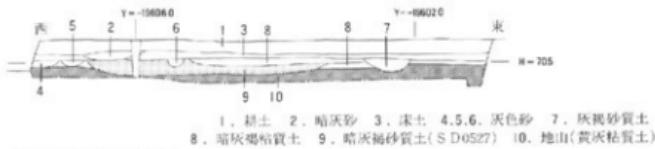


fig. 6 発掘区北壁東部土層図

3間(3.5尺等間)、梁行1間以上(3尺)と極めて小規模な仮設的建物。東西溝S D0525廃絶後に建つが、柱穴の重複からS B0521より時期は古い。

S A0524 発掘区東南隅にある東西柱列。2間分(7尺等間)。東西溝S D0525廃絶後に設けられる。

S D0525(PL.8) 発掘区南端にある道路状遺構S F0529の南側溝にあたる東西溝。遺存状況は良好でないが、最大幅約1.5m、深さ約15cmほど。埋土から出土した土器類の年代から奈良時代後半に廃絶したことがわかる。

S D0527(PL.4) 発掘区東寄りで検出した南北に長い溝状の窪み。幅約3.5m、深さ10~15cmほどあり、S D0525以南では検出されない。出土遺物から奈良時代後半に廃絶したと推定されるが、性格等は不明で、今後の検討が待たれる。

S F0529(PL.8) 発掘区南端にある二条の東西溝S D0525、S D0530を伴なう東西方向の道路状遺構。十六坪の条坊復原をすると、坪を南北に二分する位置にある。道幅は、溝心々で約3.6m(12尺)になる。検出状況から京造當当初から設置され、また二条の溝の廃絶時期が同時であることから、奈良時代後半に廃絶する宅地割の施設と判断される。

S D0530(PL.8) 道路状遺構S F0529の北側溝と推定される東西溝。幅約1.2m、深さ10cmほどで断続的に遺存する。出土遺物からS D0525と同時期に廃絶したことがわかる。

S K0538(PL.9) 井戸S E0540の東南にある矩形状の大形土壠。深さ約20cm。埋土の堆積状況や出土遺物からみて、S E0540の掘形と同時期で井戸掘形の一部とも考えられる。

S B0539 発掘区東端中央に位置する擡立柱東西棟建物。桁行4間以上(7.5尺平均)、梁行2間(6.5尺等間)で、東妻は発掘区外に出る。柱擡形等の重複からS B0565、S E0540より時期は降る。

S E0540(PL.11) 発掘区東端中央で検出した井戸。掘形は、東西約2.5m、南北約3mの長円状になり、深さは中央部で遺構検出面から2.2m。井戸枠は、東西60cm、南北約70cmで、縦板組になり四隅の内側に角柱をたて、横桟を渡して縦板を支える構造になる。枠板は下端から約1m分、及び横桟は2段残存する。出土遺物は、土器類のはかるつぼなどがあり

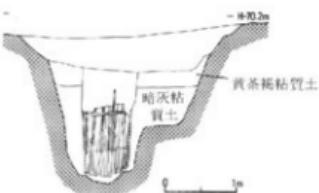


fig. 7 SE0540断面実測図

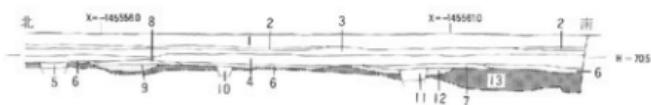


fig. 8 発掘区東壁南部土層図

井戸廃絶時期は、奈良時代中頃と考えられる。

S A 0544 井戸 S E 0540 の北側にある掘立柱東西塀で、3間分(6尺等間)を検出。柱筋は、東で北にやや振れる。S E 0540 の日陰塀と考えられる。

S B 0545(PL.5) 発掘区東北部にかかる南廻付の掘立柱東西棟建物。桁行3間以上(6尺等間)、梁行2間(6尺5寸等間)、廻1間(6尺5寸)で全体的に柱間は狭い。身舎柱の柱掘形は、一辺60cmほどの隅丸方形で、深さ約40cmと浅い。

S B 0550 発掘区中央南寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行4間(7尺5寸平均)、梁行2間(8尺等間)で、柱掘形はやや小さい。棟方向は北で東へやや振れており、時期は降ると思われる。なお、西南隅柱掘形から鉄釘が出土。

S B 0555 S B 0550の東どなりにある掘立柱南北棟建物。桁行3間(7尺等間)、梁行2間(6尺等間)。東側柱北端間の柱掘形は中世の南北溝によって壊される。南妻柱筋の柱掘形は、東西溝 S D 0530や南北溝状遺構 S D 0527の廃絶後に掘られる。

S D 0560 発掘区中央東寄りにある素掘りの南北溝。幅約40cm、深さ10cmほど。南北棟 S B 0580の東雨落溝を兼ね、南端は中世溝に壊わされるが坪内小路 S F 0529の北側溝 S D 0530に注ぐと考えられる。南北棟 S B 0590の廃絶後に掘られる。

S B 0561 S D 0560の南端にある掘立柱東西棟建物。桁行3間(6尺等間)で、両妻柱は検出しなかったが、梁行2間(5.5尺等間)と考えられる。柱掘形は全体的に小さい。道路状遺構 S F 0529廃絶後に建てられる。

S B 0565(PL.5) 発掘区中央にある掘立柱南北棟建物。桁行3間(6尺平均)、梁行2間(南妻柱筋6尺等間、北妻柱筋6.5尺等間)で南から1間目に間仕切がある。全体にやや歪んだ平面になるが、柱掘形の重複や配置からみてこの付近に建つ建物のなかで時期は最も古いと思われる。

S B 0570(PL.6) 発掘区中央にある掘立柱建物で総柱になる。東西2間(6尺等間)、南北2間(8尺等間)で南北にやや長い平面をもつ。柱掘形は一辺60cmほどの隅丸方形になり、深さは約40cm。西側柱は、井戸 S E 0600の掘形によって壊される。小規模な倉庫風の建物と思われる。西北隅柱掘形から土馬が出土した。

S A 0576 発掘区東北にある南北塀。3間分(6.5尺平均)検出。

S B 0580(PL.6) 発掘区中央北端に位置する掘立柱南北棟建物。桁行3間(9尺等間)、梁行2間(8尺等間)となる。ただし、北妻柱の掘形はやや小さく、西へ片寄るので間仕切



fig. 9 発掘区西壁南部上層図

柱の可能性もある。柱掘形は一辺70cm前後の隅丸方形で、深さ50cmほど。なお、東北隅柱掘形を切る土壌状の小穴（S K0710）から、6131A型式の軒丸瓦が出土した。

S B0584 発掘区北東端に建つ南北柱列。3間分（6尺等間）検出。建物となる可能性がある。柱掘形の重複からS B0545より時期は新しい。

S A0585 S B0584の西側に位置する南北塀。3間分（5.5間尺等間）検出。

S B0590 発掘区東北寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行3間（5.5尺等間）、梁行2間（7尺等間）で、柱掘形は、径40cm前後の円形状になる小規模な建物。柱掘形の重複から、S B0580及びS D0560より時期は古い。

S K0594, 0595 発掘区東北隅にある径1mほどの円形状の土壌状掘形で、3mの間隔で東西に並ぶ。深さはS K0594が50cm、S K0595が90cmあり、柱掘形の可能性も残る。

S E0600A (PL. 9) 井戸S E0600Bの掘形に切られる一辺2m、深さ90cmほどの大型の方形状土壌。埋土は黄茶褐色砂質土で均質的に堆積しており、また遺物の出土は極めて少ない。井戸S E0600Bより一時期前の井戸掘形の可能性が強いので、これをS E0600Aとした。

S E0600B (PL. 9) 発掘区中央に位置する井戸。掘形は、長径3.5m、短径3mの長円状になり、造構検出面から80cmほど全体を掘ったところで北半部のみ更に2.2mほど掘り下げて井戸枠を据え付ける。井戸枠は、内径東西約80cm、南北約60cmの矩形になり、下端から

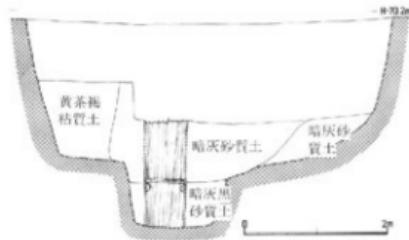


fig. 10 SE0600断面実測図

1.5mほどが残存する。枠板は、扉板を転用したものと思われ、厚さ5cmの1枚板で各面を囲い、内側中程に角材（南北）及び半丸太材（東西）を井桁状に渡す。しかし、各部材に仕口穴等ではなく極めて簡単な構造になる。井戸掘形から出土した遺物の年代から奈良時代後半に構築され、奈良時代末期に廃絶したと考えられる。

S B0610 井戸S E0600西南に建つ掘立柱建物。純柱。東西2間（8尺等間）、南北2間（6尺等間）で東西に長い平面になる。柱掘形は一辺40cm前後と規模が小さい。柱掘形の重複からみて、S B0640より時期は古い。

S B0615 井戸S E0600の北にある掘立柱東西棟建物。桁行3間（7尺平均）、梁行2間（6尺平均）。西北隅柱掘形は、土壌S K0625の底から検出したので、時期はこれより古い。

S B0620 井戸S E0600の東端にある掘立柱建物。西北部はS E0600の掘形で壊されるが、東西2間（6尺等間）、南北2間（8尺等間）と南北に長い平面になり、またS B0570と規模が同一であるので、純柱の可能性がある。全体の配置から考えて、この建物の方が古く、S B0570は建て替えたと考えたい。

S K0625(PL.8) 発掘区北西にある東西方向に長い溝状の大土壙。幅2.5m、長さ6m、深さ15~20cmある。奈良時代中頃に属する土器類が多量に出土した。

S B0630 発掘区北端中央にある柱列。2間分(6.5尺等間)検出。柱掘形は約30cmと小柄であるが、南北棟建物の南妻柱列にあたる可能性が強い。柱掘形の重複からS B0580より時期は新しい。

S B0635 発掘区南端西寄りにある2列の東西柱列。各3間分(6.5尺等間)検出。柱掘形は50cmほどで小さいが、柱筋は揃う。柱列の間隔は4.2m(14尺)ある。妻柱を検出していないが、桁行2間(7尺等間)の東西棟建物に復原できる。柱掘形の検出状況からみて時期は降ると思われる。

S B0640(PL.7) 井戸S E0600の西南にある掘立柱建物。総柱になる。東西2間(6尺等間)、南北2間(7尺等間)で、建物規模に比べて柱掘形は一边60cmほどと大きく、倉庫風の建物であろう。建物の方位は、北で東へ振れており時期は降ると思われる。

S A0645 発掘区中央北寄りにある柱列。5間分検出。柱間は2m前後でやや不揃い。柱筋は東に振れる。性格は不明。

S B0650 S B0615とはほぼ同一に建つ掘立柱東西棟建物。桁行3間(6.5尺前後)、梁行2間(7尺等間)。柱掘形は径30cmほどで小さい。S K0625と重複するが、時期はこれより古い。

S B0655 S B0650の北に位置する小規模な掘立柱東西棟建物。桁行3間(5尺等間)、梁行2間(4尺等間)で、柱掘形は20cm前後と小さい。S K0625と重複するが、時期はこれより古く、また全体の配置から考えて、S B0650より新しい。

S B0660 発掘区西端南半に並ぶ柱列。4間分(7尺等間)検出。柱掘形は、30cm前後と小さいが、整然と並んでおり南北棟の東側柱列の可能性が強い。

S K0665 発掘区西南にある不整形大土壙。深さ20cm前後。東端は、S B0640の柱掘形にかかる。土器類が多量に出土した。

S B0672 発掘区西寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行3間(7尺余り)、梁行2間(6尺5寸等間)で南半に間仕切柱が建つ。北妻柱掘形から瓦器(13世紀)が出土した。

S B0675 発掘区西端中央に位置する掘立柱南北棟建物。東西2間(7尺等間)、南北2間(10尺平均)と変則的な平面になる。柱掘形の一部が奈良時代後半に掘られた土壙等やS B0640の柱掘形で壊されており、時期は古くと思われる。

S B0678 発掘区中央西寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行4間(6尺5寸平均)、梁行2間(8尺等間)。東側柱は、中世溝等によって壊されたため、遺存状況は良好と言えない。北妻柱掘形は、S B0615と重複するが、時期はこの建物の方が新しい。

S B0680 発掘区西端中央にある掘立柱東西棟建物。西半部は発掘区外へ出る。桁行2間以上(8尺等間)で東妻柱は検出しなかったが、梁行2間(7尺等間)と考えられる。棟方向は東でやや南に振れる。遺存状況は良くない。柱掘形は一边60cm以上で比較的整然とする。S B0675と重複するが、時期はこの建物が新しい。

S K0685 S B0680内にある不整形の大型土壙で、時期は、出土遺物の年代から奈良時代後半と思われる。

S B0690 発掘区北西にある掘立柱建物。遺存状況は良くないが、桁行2間以上(4.5尺前後)、梁行2間(5尺前後)の東西棟建物に復原できる。柱間に比べて柱掘形は大きい。棟方向は、東でやや南に振れる。

S K0692, 0693, 0702, 0704 いずれも発掘区北西に分布する土壙で、深さは10~20cmほどと浅く、不整形である。奈良時代後半に属する土器類がかなり出土した。

S B0700(P.L.7) 発掘区北西隅に位置する掘立柱南北棟建物。桁行2間以上(6.5尺等間)、梁行2間(6.5尺等間)になり、北半は発掘区外に出る。南妻柱列は、いずれも土壙S K0625の底から検出されており、時期は古い。

S D0716, 0720 一条大路確認のため調査地区北寄りに設けたトレンドチで検出した素掘りの中世溝。幅30cm、深さ10cmほどで、一条大路推定位置より南にあることが判明した。ともにほぼ東西の直線上に位置しており、同一溝の可能性もある。

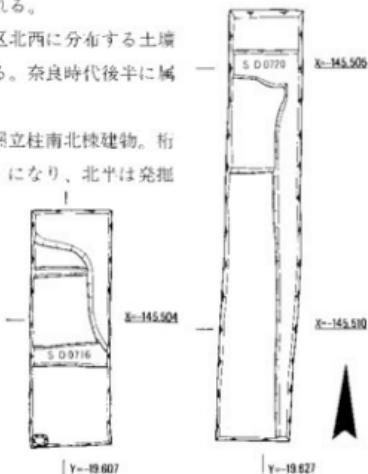


fig. 11 西北及び東北トレンチ横構図

时期	遺構番号	規 模		棟方向	備考	时期	遺構番号	規 模		棟方向	備考
		桁行(尺)	梁行(尺)					桁行(尺)	梁行(尺)		
A	S B0645	3以上(6)	2(6.5)	東西	南北(6.5)	C-1	S B0615	3(7)	2(6)	東西	
	S B0655	3(6)	2(6.5)	南北	間仕切有		S B0660	4(7)	—	南北	
	S B0650	3(6.5)	2(7)	東西			S H0521	1以上(8)	2(6)	東西	
	S B0673	2(10)	2(7)	南北			S B0561	3(6)	2.7(5.5)	東西	
	S B0700	2以上(6.5)	2(6.5)	南北			S B0630	—	2(6.5)	南北	
B-1	S B0590	3(5.5)	2(7)	南北		C-2	S B0630	2以上(7)	2(7)	南北	
	S B0620	2(8)	2(6)	南北	柱?		S B0640	2(7)	2(6)	南北	柱?
	S B0655	3(5)	2(4)	東西			S B0555	3(7)	2(6)	南北	
	S B0690	2以上(4.5)	2(5)	東西			S B0584	3(6)	—	南北	
B-2	S B0570	2(8)	2(6)	南北	柱?	D	S B0635	3(6.5)	2?(7)	東西	
	S B0580	3?(9)	2(8)	南北	北へ延びる?		S B0678	4(6.5)	2(8)	南北	
C-1	S B0522	3(3.5)	1以上(3)	南北	仮説的	E	S B0550	4(7.5)	2(8)	南北	
	S B0539	4以上(7.5)	2(6.5)	東西			S B0680	2以上(8)	2(7)	東西	
	S B0610	2(8)	2(6)	東西	柱?		S B0672	3(7)	2(6.5)	南北	中世

tab. 3 主要建物一覧表

3. 十六坪周囲の条坊復原

平城京右京二条二坊十六坪は、北に一条大路、西に西二坊大路に面し、南と東をそれぞれ十五坪、九坪との坪境小路に面している。今回の調査区が十六坪内に占める位置を明らかにするには、まずこれらの条坊道路の交点の推定復原座標を求めることが必要である。

本調査区の近隣地点で平城京の条坊に関する遺構を確認しているのは、玉手門(15次調査)、右京一条一坊四坪における西一坊大路両側溝(103-14次調査)、右京二条三坊十一、十五坪における二条条間大路両側溝及び坊間小路東側溝(123-17次調査)などがある。

これらの位置及び実測値はfig.12, tab. 4のとおりである。このうち、103-14次調査で得た西一坊大路両側溝心から



fig. 12 発掘条坊位置図

地 点 名	X	Y	調査次数
1 平城宮玉手門心	-145,753.540	-19,993.260	15次
2 西一坊大路西側溝心	-145,395.156	-19,131.783	103-14
3 西一坊大路東側溝心	-145,394.502	-19,106.135	"
4 西一坊大路東側溝心	-145,448.702	-19,107.848	"
5 二条条間大路北側溝心	-145,717.107	-20,082.222	123-17
6 二条条間大路南側溝心	-145,779.535	-20,042.112	"
7 右京二条三坊坊間小路 東側溝心	-145,777.394	-20,051.846	"

tab. 4 発掘条坊座標表

西一坊大路心を算出すると、 $X = -145,394.829$, $Y = -19,119.959$ となる。また同調査によれば、西一坊大路東側溝は国土资源方眼方位に対して北で西 $0^{\circ}20'03''$ 振れており、朱雀大路が同じく北で西に $0^{\circ}15'41''$ (平城京朱雀大路発掘調査報告書 奈良市 1974)振れているのに比較するとやや大きいことがわかる。側溝の振れを大路の振れと同一とは即断し難いが、今、西一坊大路以西の南北条坊を北で西に $0^{\circ}20'03''$ 振れているものと仮定し

	X	Y
A	-145,469.212	-19,652.212
B	-145,623.410	-19,651.435
C	-145,622.677	-19,518.237
D	-145,489.479	-19,519.014

tab. 5 十六坪復原座標表

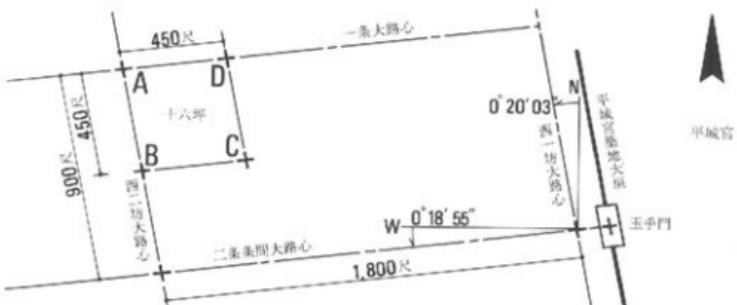


fig. 13 十六坪条坊推定復原概念図

て、103-14次調査で得た西一坊大路心から、玉手門前における二条条間大路と西一坊大路との交点の推定復原座標と求めると、 $X = -145,753.675$ 、 $Y = -19,117.866$ となる。

また、123-17次調査の成果によれば、二条条間大路（復原幅80尺）は国上方眼方位に対し西で南に $0^{\circ}18'55''$ の振れをもつことが判明しており、これを西一坊大路以西の東西条坊の振れと仮定することが可能である。

この南北方向、東西方向の条坊の振れを考慮して、先に求めた玉手門前における二条条間大路と西一坊大路との交点の推定復原座標と、玉手門心との距離を計算すると24.606mとなり、大路心から平城宮築地大垣心までの計画尺（80尺）に近い値を得る。

したがって、南北条坊が国上方眼方位に対して北で西に $0^{\circ}20'03''$ 、東西条坊が西で南に $0^{\circ}18'55''$ の振れを持つものと仮定し、小路心々間計画尺450尺として、十六坪をめぐる条坊の交点の推定復原座標を試算した。なお、これまでの調査で判明している計画単位尺は場所によって1尺あたり $0.294\sim 0.296$ mと定まらないが、123-17次調査では条坊の計画単位尺が 0.296 mに近似することが判明しており、今回の試算でもこの数値を採用することとした。結果はtab.5のとおりである。

4. 占 地

十六坪を囲む条坊路の交点の推定復原座標をもとに、今回調査地区の位置を復原すると、fig.14に示すように十六坪の中央西寄りにあたることがわかる。そこで検出した道路状遺構S F0529の位置を考えてみたい。まず、一条大路心と十五・十六坪の坪境小路心との距離450尺を二等分する線は、東西溝SD0530上に位置する。また、一条大路計画幅を80尺、十五・十六坪の坪境大路計画幅を20尺と考えると、坪の南北長は400尺となる。この二等分線は、東西溝SD0525に位置する。

のことから、二条の東西溝SD0525、0530によって画される道路状遺構SF0529は、十六坪を南北に二分する位置にすることがわかる。SF0529は、平城京造営当初から構築されており、十六坪の宅地割の施設であると判断される。

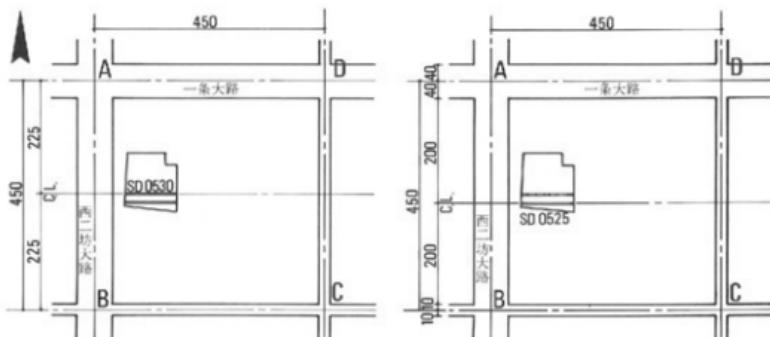


fig.14 十六坪占地概念図

5. 時期区分

調査地区は、十六坪の西辺部に位置し、坪の約 $\frac{1}{2}$ にあたる。検出遺構を検討した結果、調査地は宅地として利用されたものと思われる。奈良時代の敷地利用は、坪内に貫通する小路 S F0529が京造営当初から存在し、奈良時代の後半に至り廃絶したと考えられることから大きく2時期に大別でき、更に建物や井戸等の遺構の重複関係や配置状況から検討すると、全体として古い順に A, B_{1,2}, C_{1,2}, D の4期に区分することができた。

A期（奈良時代初頭） 十六坪は、坪内東西小路

S F0529によって南北に二分される。南袖付東西棟 S B0545は、北半坪の中央やや西南寄りに位置する。柱間寸法は、桁行6尺、梁行及び庇の出が6尺5寸と小さいが、この区画における主要建物であり、西南に建つ南北棟建物 S B0565とともに居住区画を形成すると思われる。

他の3棟は、いずれも付属的施設と考えられる小規模な建物で、その配置に計画性は特にみられない。

B期（奈良時代前半～中頃） 宅地側は、A期を踏襲すると考えられる。発掘区東端に井戸 S E0540が掲られ、これを中心とする付属的施設が建ち並ぶ。この時期は、建物の一部に建て替えがあり、B₁, B₂の2期に細分できる。

B₁期は、倉庫風の建物 S B0620をはじめ、小規模な建物が建ち並ぶ。各建物の柱間は5～6尺が主で規模も小さく、また柱筋もやや雑然となり、雜舎を想起させる。発掘区東端の井戸 S E0540を中心とする付属的施設が建つ区画として利用されたものと思われる。

B₂期は、B₁期の雜舎等を建て替え整備したと考えられる時期である。即ち S B0590は S B0680に、S B0620は S B0665に建て替わる。また、これらの建物の東側に S B0680の雨落溝を兼ねる水路 S D0560が掲られる。調査範囲内では西半部に建物はなく、土壤が掲られたようである。

井戸 S E0540は存続するので、敷地利用形態は基本的にB₁期を踏襲したと思われる。

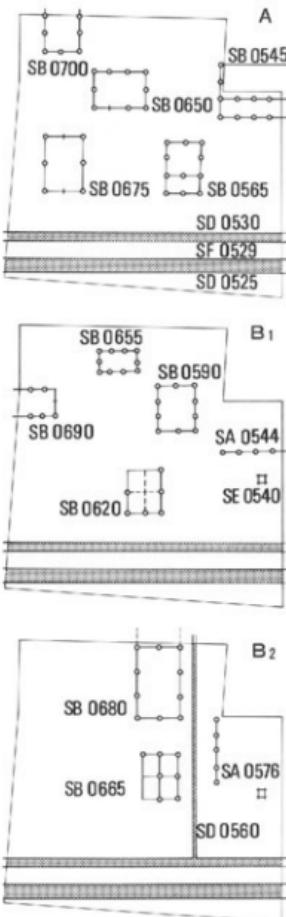


fig. 15 時期変遷図（I）

C期（奈良時代後半） 坪内を二分する東西小路

S E0529は廃絶し、少なくとも十六坪西半は一体として利用されたと考えられる。

この時期は井戸 S E0600を中心とし、それを囲むように配置される建物群から構成されている。いずれも小規模な建物であることから、敷地利用は前期と同様に付属施設が建つ区画であった。C₁、C₂の2時期に細分できる。

C₁期は、調査地中央の井戸 S E0600Aの周囲にSB0539をはじめ、縦柱の建物SB0610など全体的に建物が立ち、建ぺい率も高くなっている。SB0522は極めて規模が小さく、仮設的。

C₂期は、調査区南半に建物が集中し、敷地利用に若干変化がみられる。しかし、井戸 S E0600BはC₁期の井戸 S E0600Aの改作であり、SB0521及びSB0640は、それぞれSB0539、SB0610の建て替えと考えられるので、全体としては変わらない。建物の一部に側柱筋を合わせるなど配置上に配慮がみられる。なお、調査地北辺や西辺には多くの土壤が掘られた。

D期（奈良時代末期） 敷地はC期のものが踏襲されたが、井戸 S E0600Bは廃絶している。

南北棟建物を主に4棟の建物が調査区全体にわたって建ち並ぶ。建物の規模は桁行3間、梁行2間が主で、柱間も6~7尺と狭い。奈良時代末期に属する出土遺物が極めて少ないとから、この地区的性格は、B、C期とかなり異なると思われる。しかし、坪の西方であり、しかも規模の大きな建物は存在しないので、前期间様に付属的施設が建つ区画と考えられる。

平安時代以降 この地区は、平安時代以降も一時宅

地として利用されたらしいが、判明した主要造構は、SB0550、SB0672、SB0680のほかにはなく、利用密度は極めて低い。また、この時期の出土遺物もほとんどないので平城京廃絶とともに宅地として利用されなくなったものと考えられる。それ以後は、若干の南北斜行溝や土壤群が存在するにすぎない。

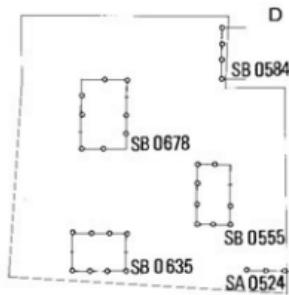
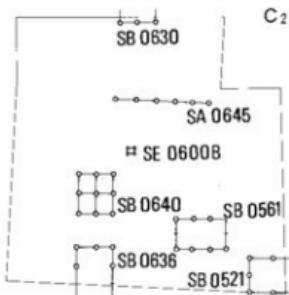
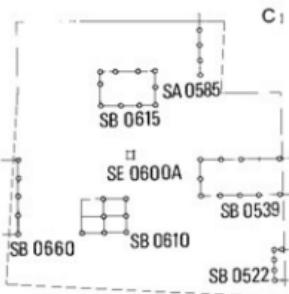


fig. 16 時期変遷図 (II)

III 遺 物

1. 土 器 (PL.12~14)

調査区全域から、多量の奈良時代土師器・須恵器の他、墨書き土器・土馬や製塩土器が出土した。他に13世紀代の瓦器が少量ある。遺構以外に、調査区南半で厚く堆積する遺物包含層からも多く出土した。量的には須恵器が多く、時期的には奈良時代中頃から後半にかけてが中心である。以下、土器の説明は、遺構で數量的にまとまるものをとりあげる。これら年代は、井戸 S E0540出土土器が奈良時代中頃、井戸 S E0600出土土器が奈良時代中頃～後半、土壤 S K0625出土土器が奈良時代前半～中頃、土壤 S K0665出土土器が奈良時代中頃、道路 S F0529の側溝 S D0525・S D0530出土土器が奈良時代中頃に属する。

(註)

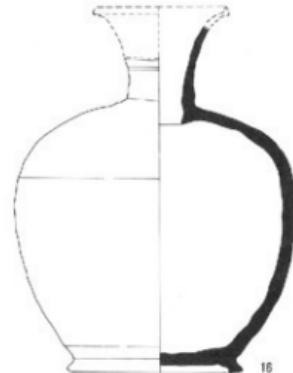
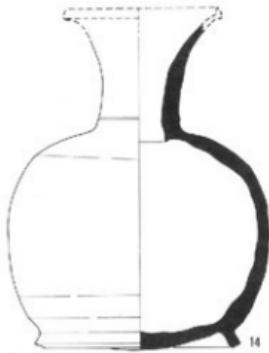
S E0540出土土器 (fig.17~18, PL.12) 井戸掘形から土師器杯A・杯B・皿A・高杯・甕A・須恵器杯A・杯B・杯B蓋・椀B・鉢A・鉢D・壺・甕A・甕X・土馬・製塩土器、井戸枠内埋土から土師器杯A・皿A・皿C・高杯・甕A・甕X・須恵器杯A・杯B・高杯・鉢D・壺E・壺L・横瓶・甕A・製塩土器が出土した。fig.17の2・4・8が掘形出土の他は井戸枠内出土である。器種も豊富で、墨書き土器も含み、一括資料として重要である。

土師器 皿A(11)は口縁部を横なでし、底部外面不調整で、螺旋・斜放射暗文がある。底部外面中央には「依田佐良」の墨書きがある (PL.14)。皿C(10)は口縁部横なで、底部外面不調整である。灯火器に使われ、口縁端部3ヶ所に煤が付着する。甕A(12)は体部外面にハケメを施し、口縁部外面から肩部にかけて横なでするが、ハケメが残る。口縁部内面は横方向のハケメ、体部内面はなでる。甕X(13)は「く」の字状に開く口縁部と細長い体部からなり、底部は平底である。口縁部外面は横なでするがハケメが残る。体部外面上半は斜方向のハケメ、下半は縱方向のヘラ削りを施す。口縁部内面は横方向のハケメ、体部内面のハケメは上部が斜方向、中央部が縱方向、下部が横方向である。底部外面はなでる。

須恵器 杯A(5)は底部外面から口縁部下半までロクロ削りする。6は底部外面へラ切りの後、なでを加える。杯Bには底部外面ロクロ削りするもの(1)と、ヘラ切りのままのもの(2)がある。椀B(8)は長い口縁部が直面に近くたちあがり、高台は低い。口縁部外面下半をロクロ削りする。底部外面はヘラ切りの後、なでる。高杯(3)は杯部を欠く。壺部内面に「山部口鳴」の墨書きがある。甕Eには大型で平底のもの(7)と、高台をもつものの(9)がある。7は底部外面から体部外面下半をロクロ削りする。9は体部外面は肩以下ロクロ削りで、肩の稜は鋭い。甕L(14)は体部が球形で、肩以下ロクロ削りする。底部外面はなでる。頸部に凹線が1条ある。16は卵形の体部で、肩以下ロクロ削りする。底部外面はロクロ削りする。頸部に凹線が2条めぐる。15は肩がやや張り、歯齒状の刺突文がある。体部下半はロクロ削りする。底部の高台接合部には、指おさえの凹みが一周する。底部外面はヘラ削りである。横瓶は体部片で、図示していないが、内面の当板の同心円文の中心は★形である。甕A(17)は口縁部横なでし、体部外面は平行叩き目を施すが、上半部はカ



fig. 17 SE0540出土土器 (I)



0 20cm

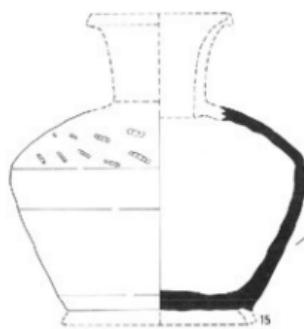


fig. 18 SE0540出上土器 (II)

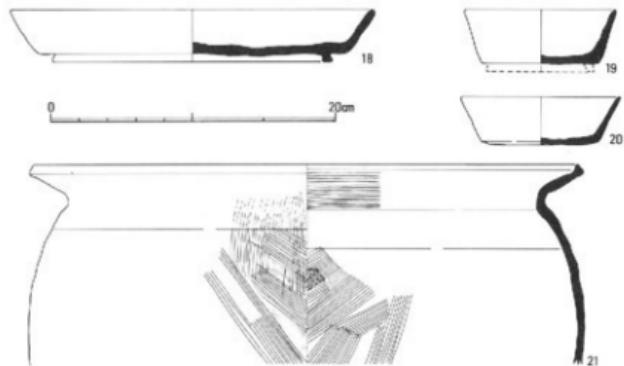


fig. 19 SE0600井戸枠内出土上器

キメ、下半部はなでにより消している。体部内面は上半部が当板の同心円文をなでて消す。下半部もなで調整するが、部分的に叩き目が残る。裏X(4)はやや外反する短い口縁部に、長い体部がつく。口縁部は回転を利用してなで、体部上半の平行叩き目は横方向のなでで消している。下半は斜方向の平行叩き目が残る。体部内面は横方向になでる。

S E 0600出土土器(fig.19・20, PL.13) 井戸掘形から土師器杯A・杯B・皿A・椀A・盤B・高杯・表A・かまと、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿B・皿C・盤A・鉢A・鉢D・壺・壺A蓋・平瓶・表A・表B、製塙土器、井戸枠内埋土からは土師器杯A・皿A・皿C・高杯・表、須恵器皿B・盤・壺・表、製塙土器が出土した。掘形からの出土量が多い。井戸のつくりかえによるものであろう。

土師器 杯B(26)は外面をヘラ削りした後、口縁部にヘラ磨きを施す。23は口縁部が大きく開く浅い器形で、外面をヘラ削りし、細かいヘラ磨きを施す。口縁部内面上部もヘラ磨きする。底部に螺旋暗文、口縁部には斜放射暗文と螺旋暗文を重ねている。皿A(24)は外面をヘラ削りする。25は口縁部を横なで、底部外面へら削りである。皿X(22)は口縁端部が外側に肥厚する。口縁部横なで、底部外面不調整である。盤B(27)は口縁端部が強く外反し、内側に巻き込む。保存状態が悪く、調整手法は不明である。表A(21)は大型で、口縁部外面を横なでするが、ハケメがわずかに残る。内面は横方向のハケメを施す。28は小型で、口縁部は横なでし、体部外面はハケメをなでによって消している。

須恵器 杯Aには底部外面から口縁部下半をロクロ削りするもの(30・31)と底部外面へら切りのままのもの(20)がある。杯B(19・32)は底部外面へら切りのままである。19は高台がはずれた後、底部外面を磨る。杯B蓋(29)は頂部外面へら切りのままである。杯C(35)、皿C(34)は焼成が悪い。ともに底部外面へら切りのままである。皿B(18)は底部外面をロクロ削りする。壺A蓋(33)は頂部外面へら切りのままである。鉢D(37)は体部外面下半から底部をロクロ削りする。体部外面に火棒がある。平瓶(36)は体部外面をロクロ削

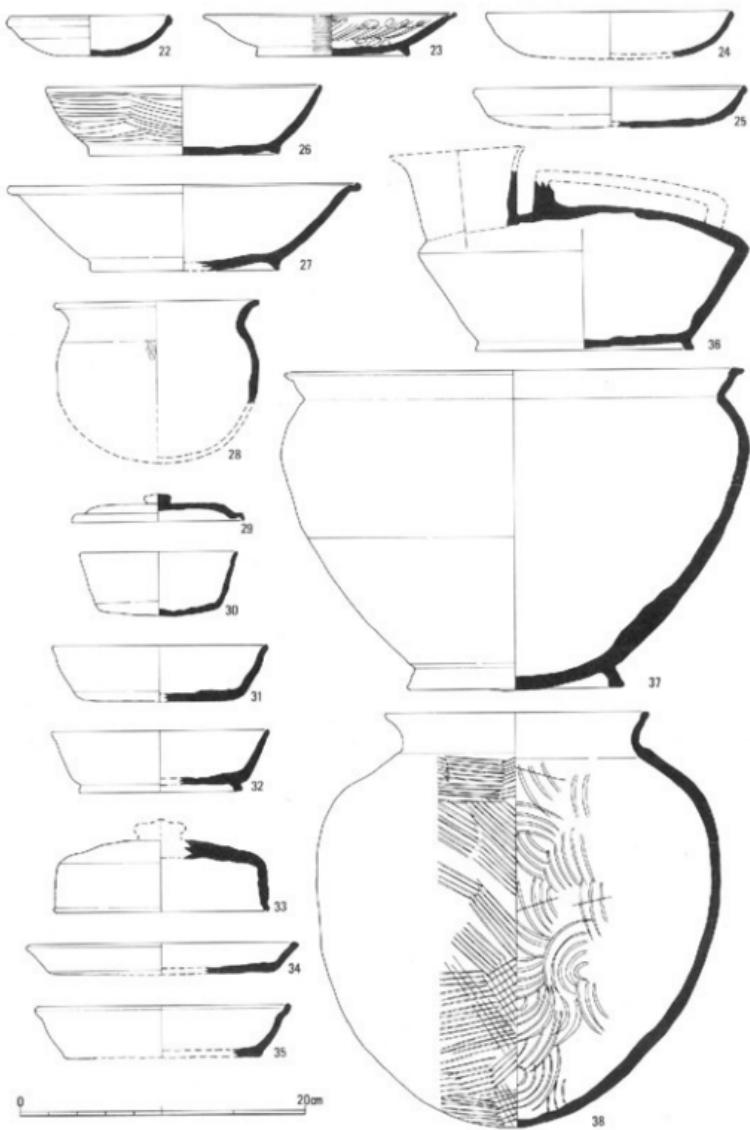


fig. 20 SE0600井戸掘形出土土器



fig. 21 SK0665出土土器

りし、ロクロなでを加える。甕B(38)は口縁部をロクロなしで、体部外面は肩部に横方向、肩以下は斜方向の平行叩き目がある。内面は当板の同心円文が残る。

S K0665出土土器 (fig.21) 土師器杯A・杯B・皿A・椀A・高杯・壺・甕A・須恵器杯A・杯B・杯B蓋・皿A・壺・壺A蓋・甕の他に、少量の製塙土器がある。

土師器 杯A(40)は口縁部は横なしで、底部外面はヘラ削りで、螺旋・斜放射暗文がある。杯C(39)は口縁部を横なしで、底部外面不溝整で、螺旋・斜放射暗文がある。

須恵器 杯B蓋(42)は頂部外面ヘラ切りのままである。皿A(41)は硬質で、底部外面はロクロ削りする。

S K0625出土土器 (fig.22, PL.13) 土師器杯B・皿A・高杯・甕A・甕B・須恵器杯A・杯B・杯B蓋・椀A・鉢F・壺A・壺K・甕A・甕Bがある。土師器は小片である。

須恵器 杯A(46~48)は底部外面ヘラ切りのままである。杯Bには法量の大きいもの(45)と小さいもの(44)がある。44は底部外面をロクロ削りし、45はヘラ切りのままである。椀A(43)は口縁部が直線的にのびる。底部外面から口縁部外面下半をロクロ削りする。

S D0525・S D0530出土土器 (fig.22, PL.13) 土師器杯A・杯C・皿A・皿C・椀A・高杯・壺B・甕A・甕B・かまと、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿B蓋・鉢A・鉢F・壺A・壺D・壺E・壺L・横瓶・甕A・甕Xの他、製塙土器がある。

土師器 いずれも保存状態はよくない。杯A(51)は外面ヘラ削りの後に施したヘラ磨きがわずかに残る。杯C(49)・皿C(50)は口縁部を横なしで、底部外面は不調整である。

須恵器 杯Aには口径の割に器高の高いもの(56)と、低いもの(57)とがある。底部外面はともにヘラ切りのままである。杯B(52)は口縁部のたちあがりが大きい。60・61は底部外面ヘラ切りのままである。杯B蓋(58・59)はともに笠形の器形で、58は頂部外面のほぼ全面をロクロ削りし、59は上面だけロクロ削りする。皿B(53)は口縁部が垂直に近くたち、底部との稜が明瞭である。鉢A(54)はいわゆる鉄鉢形の器形であるが、保存状態が悪い。

壺A(55)は肩以下の体部外面をロクロ削りする。肩から口縁部にかけて灰をかぶる。壺E(62)は口縁部がやや内傾気味である。甕X(63)は「く」の字状に開く口縁部に、長い体部がつく。体部外面はロクロ回転を利用したカキメを施す。

土馬 (PL.14) S B0570の北西隅柱掘形出土である。四足は大きく開き、尾がはねあがる。目は竹管を押して表現し、頭部に枯土小板を貼って耳を表わす。全長15.2m、高さ13.0cm。他に、S E0540掘形から頭部片1点、小柱穴・遺物包含層から2点の脚部片がある。

(註) 以下、器種の表現は『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に従う。

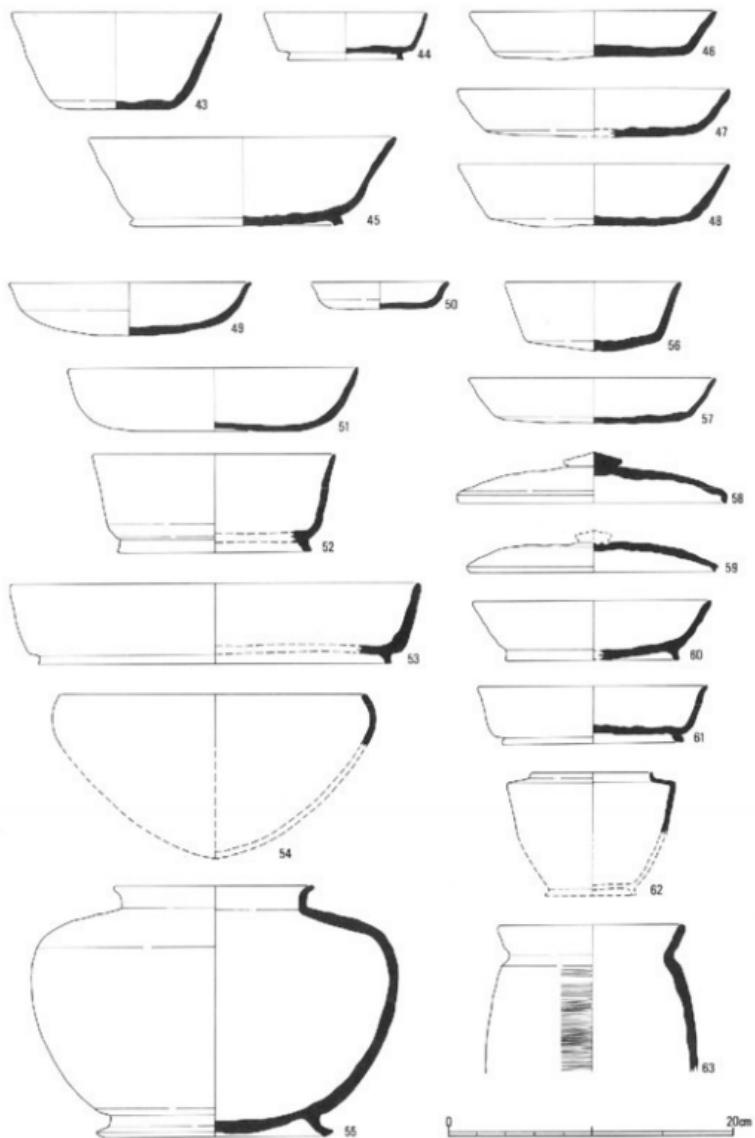


fig. 22 SK0625、SD0525・SD0530出土土器

2. 瓦 (PL.15)

瓦は整理箱約30杯分が出土した。軒瓦16点（軒丸瓦8点、軒平瓦8点）のほかは丸瓦と平瓦の破片である。以下の記述では奈良国立文化財研究所の設定した型式番号を用いる。

S D0525……軒丸瓦6282B 1点(3)と軒平瓦6647C 1点(4)が出土した。S D0527……軒丸瓦2点が出土した。6273C(1)と型式不明の小片1点である。S E0504……軒丸瓦(小片で型式不明)1点と軒平瓦4点が出土した。軒平瓦は6646F(5)2点、6721G(6)、6732C(7)各1点である。S E0600……井戸枠内から軒平瓦6641Cが1点出土している。S K0710……軒丸瓦6131A(2)が1点出土した。包含層……軒丸瓦6281B、軒平瓦6664F、鎌倉時代の軒平瓦(8)が各1点、型式不明の軒丸瓦小片2点がある。

以上のうち1・4・5および6641C型式は平城宮では708～721年頃に、3・4は745～756年頃に編年されており、8(西大寺に出土例がある)をのぞいてすべて平城宮の出土瓦と同様の関係にある。

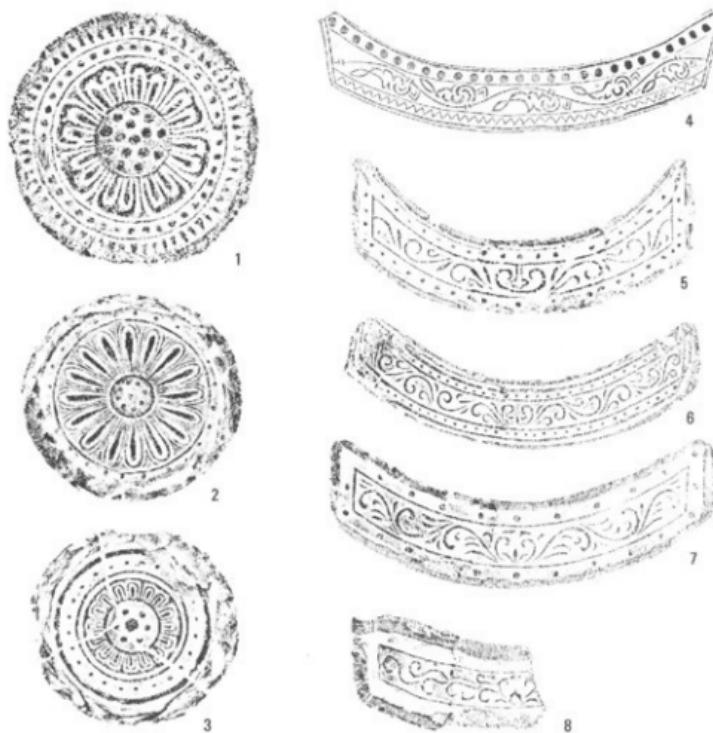


fig. 23 軒瓦

3. 金属器・土製ほか (Pl.16)

井戸 S E0540から鉄鎌、木製杓子、るつばが出土した。S B0545付近の柱穴からは和同開珎が4枚以上重なって出土したが遺存状況は悪い。また他の小土壙から銭種不明の銅錢1枚が出土している。他に刀子、海老鋸の鍔、鉄角釘、用途不明の鉱石数個が出土した。

鎌 (fig.24-1) は左右両端を欠失しており、現存長15cmある。刀子の身 (2) と海老鋸の鍔は鋗びついで形は不明であったが、X線透過で原形を知り得た。

木製杓子 (3) はイスノキの樹皮つき心持材を使用しており、平面形は短径が約6cmの梢円形を呈する。外面下半は刃幅の広い刀で荒く面取りし逆円錐形となる。内面は幅狭い丸ノミで舟念に削っている。一方に断面方形の把手を造り出している。

るつば (4) は高さ18.7cm、口径9.8cmで、砲弾形をしており、壁体は部厚く作られ、砂粒が多くて粗い。外面は斜格子タタキ目で覆われており、内面は黄味がかかった淡い緑色のガラス釉が一面にかかり、さらにその上に白色釉が流下して底部に厚く溜っている。分析の結果、この丼種から多量の鉛が検出されたことから、恐らく鉛ガラスを溶解したものと考えられる。緑色ガラスには着色のため銅が入っている。このように内面に緑色ガラスが付着した砲弾形のるつばは、平城京東市跡の堀河からも1975年に出土している (口絵上右)。

土壙 S K0625から出土した鉱石 (口絵下) の破断面は、赤色から橙黄色の短柱状結晶を呈している。X線回折分析の結果、硫化砒素(AsS)が大半を占め、石英などの鉱物が少量混入することで鶏冠石と認められた。特殊な鉱石であり薬物として利用した可能性もある。

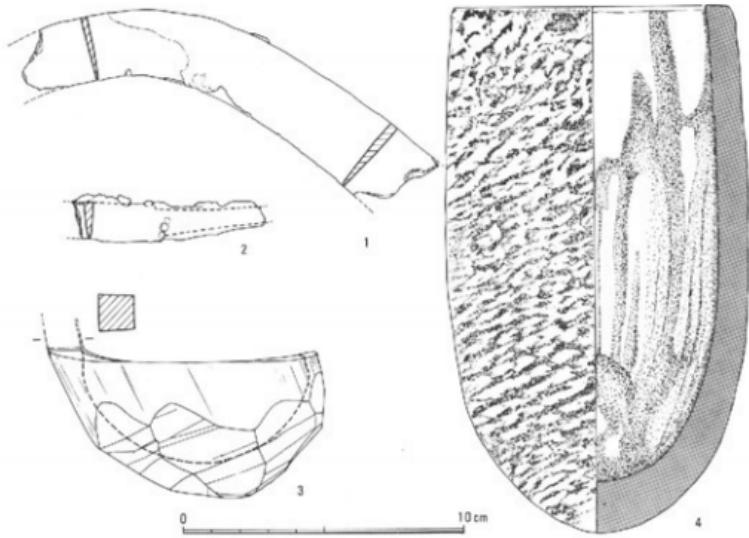


fig. 24 金属器・木器ほか

IV 結　　び

今回調査した地区は、平城京右京二条二坊十六坪の西寄りにあたる。調査面積は坪の約 $\frac{1}{6}$ であるが、この地域の坪内の状況を知る上で貴重な資料を得ることができた。前章までに調査結果の概要を記したが、ここで次の二点について検討し、結びとしたい。

(1) 十六坪の宅地割の変遷と坪内小路

十六坪は、平城宮に近接する右京二条二坊の西北隅に位置し、北と西の二面が一条大路、二坊大路に接する。検出した主要遺構は、主に平城京造営当初から平安時代初頭に至るまで存在し、同坪はこの間、宅地として継続的に利用したことがわかる。坪内を東西に貫通する小路 S F 0529は二条の側溝 S D 0525、0530を伴ない、溝心々間で約3.6m(12尺)ある。

この小路は、十六坪を南北に二等分する位置にあり、平城京造営当初から構築されたと考えられるので、宅地割のための施設ということができよう。したがって、この地区は奈良時代前半に $\frac{1}{6}$ 坪、もしくはそれ以下の班給であり、また奈良時代後半には小路が廃絶しているので、少なくとも坪西半は一休として利用されたことがうかがえる。

宅地割の施設としての小路(平安京では小径という)は、これまでの京内調査で2例検出されている。一つは、左京三条四坊七坪の東西小路(S F 1890道幅約3.6m)で、S F 0529同様造営当初から設けられている。もう一つは、左京二条二坊十三坪の東西小路(S F 2280道幅約3.0m)で、これは奈良時代後半に設置されている。この種の小路は、坪の特殊性によるものか、京内的一般的宅地割(二行八門制)と関係するものは明らかでない。

しかし、大路に面する宅地では一般に家門を開くことは禁じられており(『日本紀』天平3.9.2条)、坪の位置によっては、半坪以上の敷地利用でないと、小路を設けないかぎり家門を開けないということになる。今回調査した右京二条二坊は、右大臣大中臣清麻呂をはじめかなりの高級貴族が居住したと推定される地区である。したがって小路 S F 0529は、一般的宅地割のためになく大路に面する坪ゆえのものと考えられなくもなかろう。

(2) 墨書き土器の人名について

井戸 S E 0540から出土した奈良時代中頃に属する土器に「依田佐良」及び「田部^{カニ}鳴」と墨書きがあった。「佐良」は皿の意に解釈もできるが、全体の意味は判然としない。

後者は明らかに人名を記したもので、このように姓名とも記した墨書き土器の出土例は極めて少ない。ところで、田部氏は「田辺」とも書き、写經所の校生や經師によく見られる氏族名であるが、大納言藤原仲麻呂の家令や団司として名の知られる者も少數ながらいる。

墨書きされた人名と史料にみる人物との関係は明らかでないが、少なくともこの地区的居住者を知る一つの手掛りとなる点で、重要な資料となるであろう。

- 参考文献 1. 『平城京左京二条四坊七坪発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1980年3月
2. 『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 同上 1982年5月
3. 人井重二郎『平城京と条坊制度の研究』 1966年9月
4. 岩本 次郎『右大臣大中臣清麻呂の第』 日本歴史 319号 1974年12月

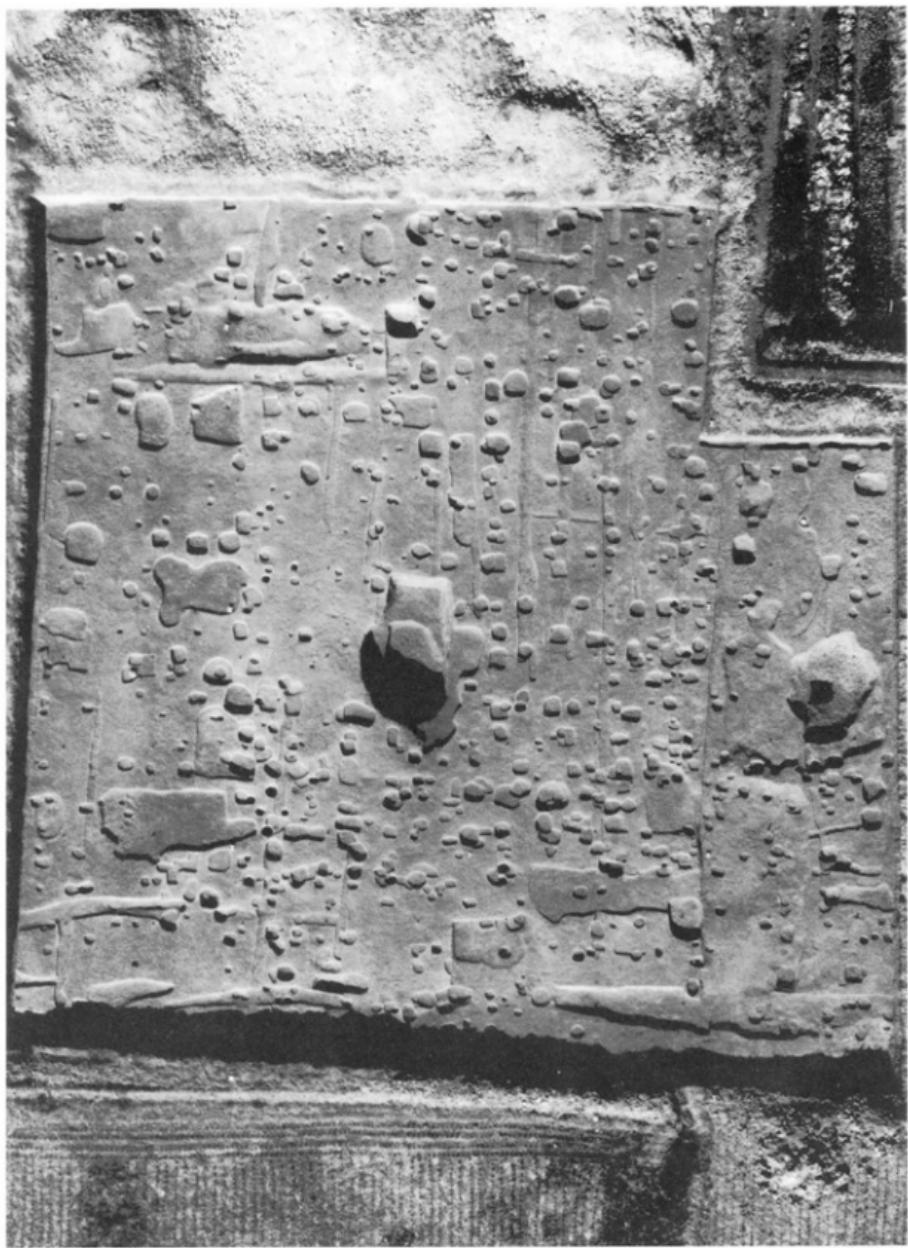
図 版



PL. 1 発掘区周辺航空写真



PL. 2 造構全景垂直写真



PL. 3 発掘区全景



南から



西から

PL. 4 発掘区部分



北から



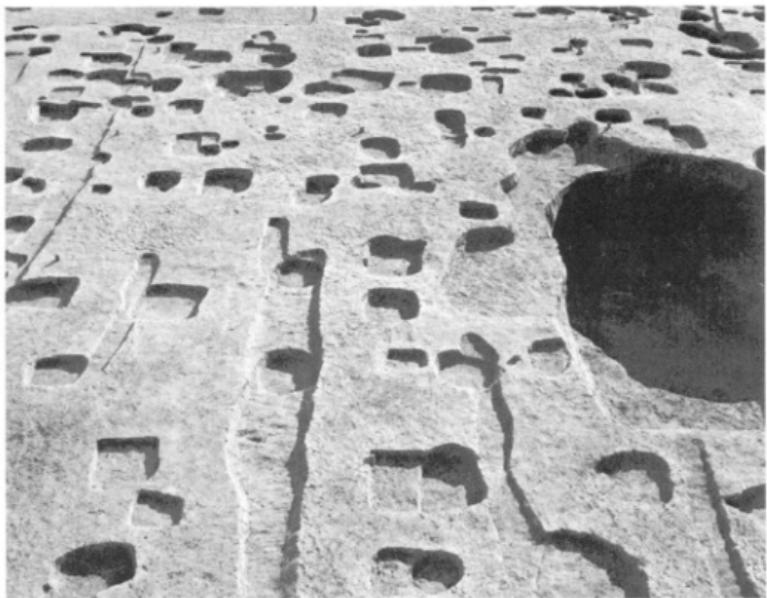
南から



SB0545 (西から)



SB0565 (北から)



SB0570 (北から)



SB0580 (北から)



SB0640 (南から)



SB0700 (北から)

PL. 8 小路・土壤



SF0529 (西から)

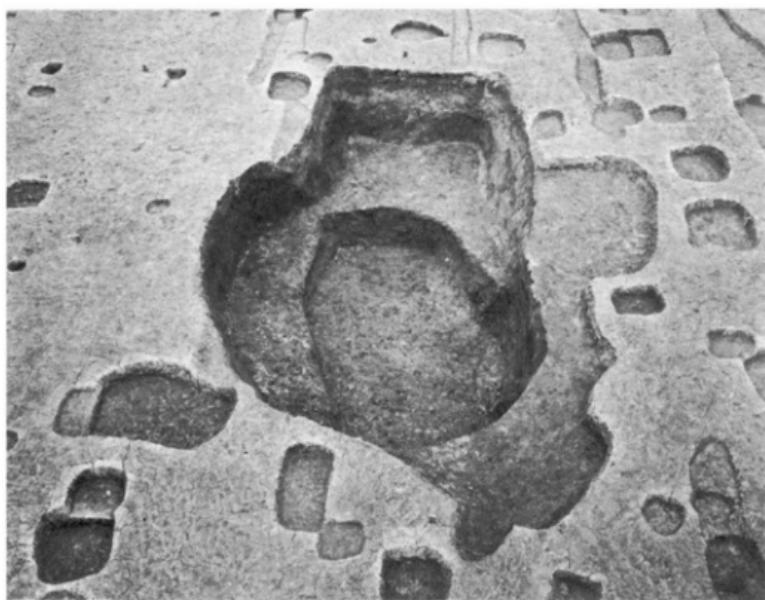


SK0625 (西から)

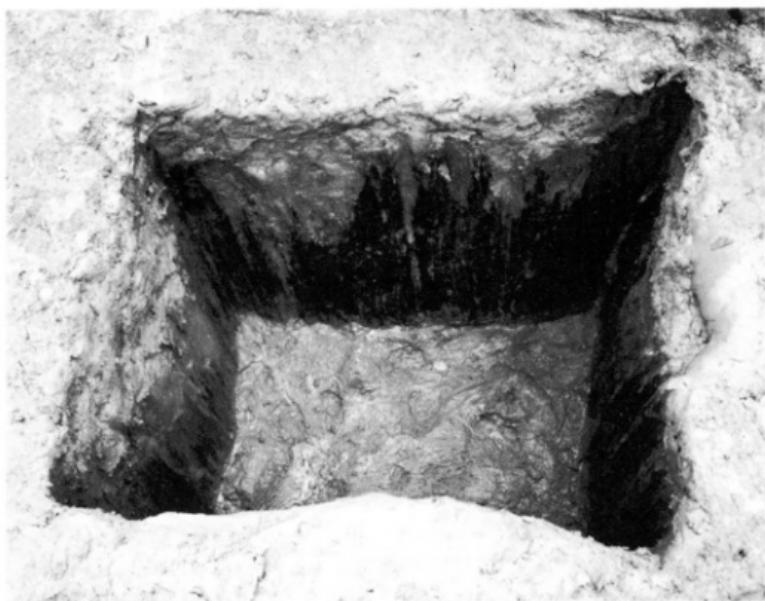
PL. 9 井戸掘形



SE0540 (南から)



SE0600 (南から)



SE0600 (南から)



SE0600 (西南から)



SE0540 (東南から)



SE0540 (北から)

PL. 12 土 器



SE0540 土器

PL. 13 土 器



SK0625出土土器



SD0525・SD0530出土土器



SE0600出土土器

PL. 14 墨書土器・土馬



3



11

▲墨書土器
(左1:1)
(右1:3)



◀上馬



4



5



1



6



7



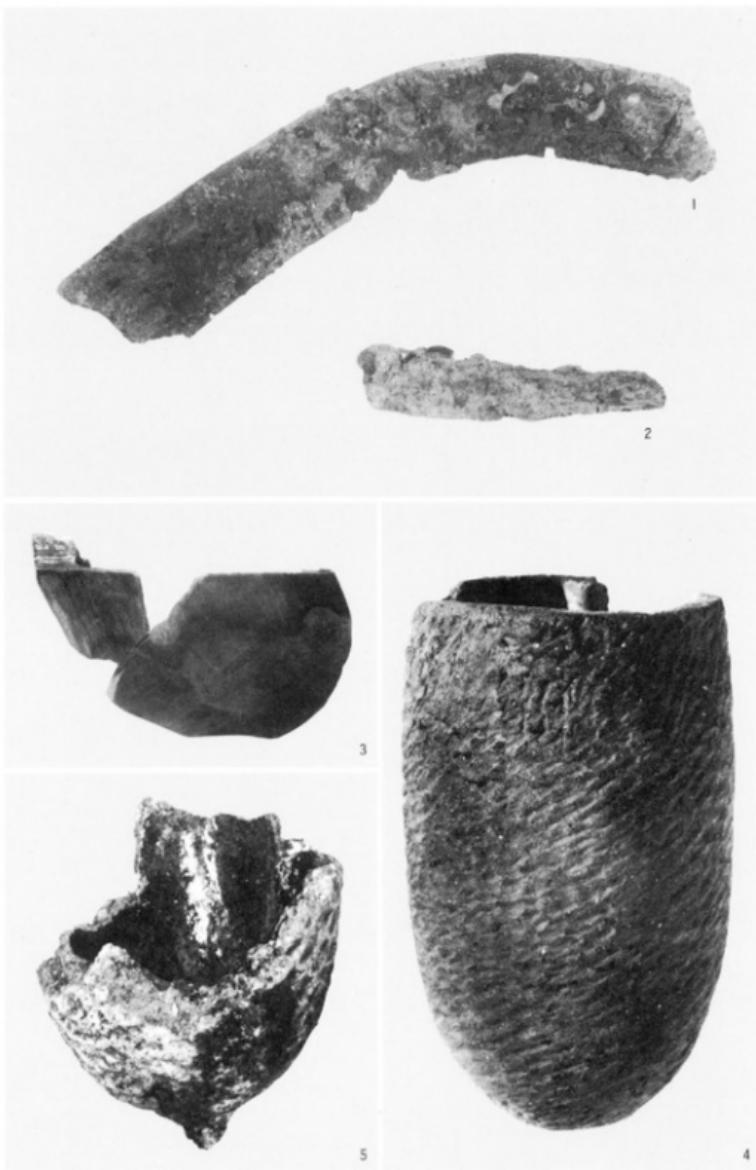
2



8

3

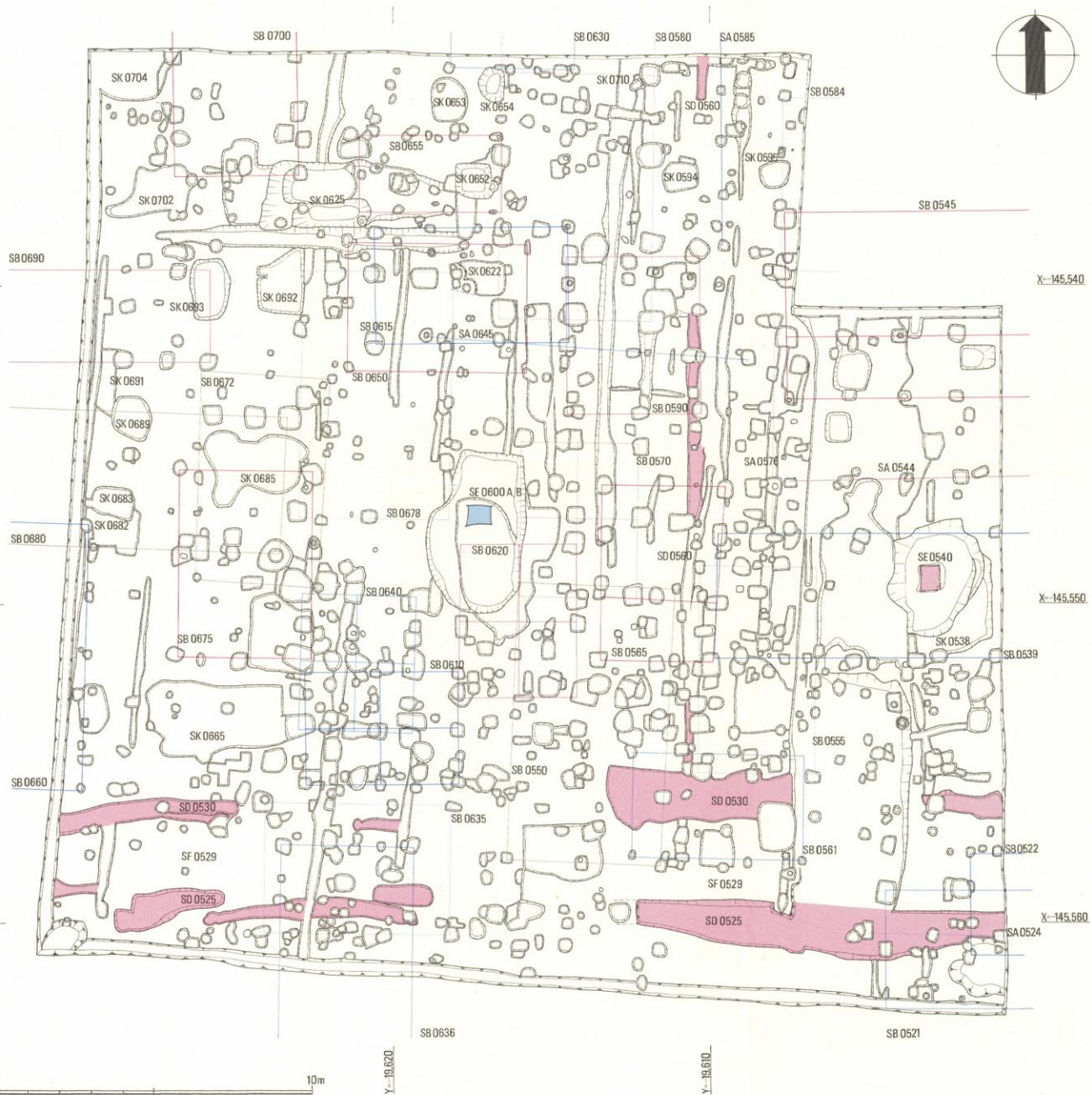
PL. 16 金属器・木器ほか



5は平城京東市跡出土

平城京右京二条二坊十六坪実測図 (1/100)

A B₁ B₂ C₁ C₂ D



平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報

昭和57年5月25日 印刷

昭和57年5月31日 発行

編集発行 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号
TEL 0742-34-3931㈹

印刷 関西プロセス
京都市右京区山ノ内山ノ下町13
TEL 075-321-3161㈹

